

ネパールの高齢者施設におけるダーン(布施)の意味

中村, 律子 / NAKAMURA, Ritsuko

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration :
reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福祉研究

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

213

(終了ページ / End Page)

225

(発行年 / Year)

2015-03-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010630>

<研究ノート>

ネパールの高齢者施設におけるダーン（布施）の意味

中 村 律 子

【抄録】 本稿は、高齢者介護が国家にも市場にも包摂されていないネパール社会において、ネパール文化のなかに内面化されて息づいてきた他者との関わりのあり方が、高齢者施設においてダーン（布施）という形をとって実践されていく様態とその背景について論じた。ダーンは貴賤を問わない、聖／俗の関係を越える実践であり、ダーンを行うことも受けることもともに見返りを期待しない贈与と認識されてきた。そのため、ダーンを行い／受ける高齢者施設は幸せの相互贈与の場としての意味が付与されるようになっている。これまで、家族や地域社会という比較的閉じられた空間で実践されてきたセワ（世話）などの土着的な贈与の観念が、高齢者施設というより開かれた社会に場を得て、より開かれた（より普遍的な）実践へと解放されつつあるとも言えよう。こうした実践をとおしてネパールにおけるあらたな高齢者介護の展開をもたらすことになることが予想される。

【キーワード】 ネパール社会 高齢者施設 ダーン（布施） 贈与 幸せ

1. はじめに

途上国であるネパールでも、否応なく進む社会のグローバル化のなかで、国家もしくは市場による社会保障がある程度整っている社会で「世界標準」とされる欧米型の考え方や規範による高齢者のための法制度化や高齢者福祉サービス、高齢者ケアへの模索は避けられない。しかしながら、ネパール社会では、老親の世話や扶養は、家族（家庭という場）が中心に行い、その家族を近隣（コミュニティ）がサポートすることが通常であった¹。家族や近隣からも外れ、家も身寄りもない貧困な高齢者は、近隣の寺院で保護されるか、唯一の国立老人ホーム（Old Age Homes、ネパール語でBriddashram）に入所していた。このように、老人ホームは、家族やコミュニティから世話を拒否された高齢者が遺棄される場所として同情と哀れみの施設としてネガティブに認識されていた。

¹ サキヤ・ラタ、藤本尚久、上野勝代らによるネパール都市空間における高齢者の居住形態についての一連の研究がある（サキヤ・ラタ、他 2004など）。

しかし、最近では、多様な主体により運営されている老人ホームの出現によって、全財産を寄附し自ら選択して入居する高齢者や、海外で仕事をする子どもたちが入居資金や毎月の利用料を負担し老親を入居させるといった動きもみられるなど、少しずつではあるが老人ホームの存在が必ずしもネガティブにだけではなく認知されるようになってきた。

ネパールにおいて政府に登録されている老人ホームは、2006年に150カ所、2010年には153カ所と微増傾向にあるが、ネパール全体の正確な老人ホーム実数は不明である²。登録されている老人ホームの設立運営は、政府系1カ所の他は、個人、NGO、ボランティア、民間団体と多様な主体となっているとの報告がなされている。正確な実数の把握がなされていないのは、補助金を受けるために施設の登録をしたものの、その後、不正受給が発覚するなどして廃止された老人ホームの運営実態が十分には把握されていないことが一因である。

このように、国家による制度が未整備であるとともに、現在の日本のように介護の市場化もすすまない現状であるにもかかわらず、デイケアセンターやグループホームを含めると、高齢者施設は確実に増え続けている。

こうした現象について、筆者らは、高齢者を取り巻く状況の変化のなかで、それまで高齢者を支えてきたローカルな「Sewa（世話）システム」を、高齢者施設が代替あるいは補完しはじめているととらえてきた（中村律子 2011, 2013）。しかし、その後の調査により、高齢者施設が、家族や地域の介護の代替・補完的なものであるだけでなく、家族や地域の人々さらには高齢者施設に関わる人々と高齢者施設を利用する高齢者にとっての幸せの相互贈与の場であり、それはダーン（dān）との関連があるのではないかということが判りはじめています。

ネパールの高齢者施設におけるダーンについては十分に研究が進められておらず、いまのところ文献を見いだせていないが、スリランカの高齢者施設において研究をすすめている中村沙絵（2011）の施設外部の一般人による食事の布施（スリランカではダーナ）についての研究からは本稿での分析をすすめる上で重要な示唆を得た。中村沙絵によれば、スリランカでは家族・親族扶養から施設などによる扶養へと社会が移行するときに、それを架橋する文化装置がダーナ（布施）であり、ダーナによるチャリティの土着化がすすんでいるという。本稿で記述するネパールの事例でも、家族・親族扶養から施設などによる扶養へと社会が移行する社会状況のなかで、スリランカと同様に、だが異なった様相でダーンが重要な役割を果たしていることを確認することになる。

本稿では、ダーンに着目して以下の3点について論じる。第1はダーンとは何か、第2はダーンとよばれる行為や実践がどのような文化的社会的背景から生まれ、特質があるのか、第3は高齢者施設が

² 2010年7月までに社会福祉カウンシルに登録されている。『Social Welfare Council 2010』のデータより。

どのようにして幸せの相互贈与の場でありえているのかについてである。

2. 調査対象と調査方法

調査対象は、4ヶ所の高齢者施設³（カトマンズ市内2ヶ所の老人ホーム、パタン市近郊のデイケアセンター1ヶ所、バクタプール市有料老人ホーム1ヶ所）での施設責任者、入居・通所の高齢者、ダーンする人である。調査方法は、上記高齢者施設における参与観察ならびにインタビュー調査を実施した。調査内容は、会計報告書の閲覧・収集、ダーン（寄附や布施した者）名簿の閲覧・収集、ダーンの目的、内容、様式の実態と特徴などについてである。調査期間は、2013年8月21日～9月3日、2014年8月24日～9月4日である。

3. 倫理的配慮

本研究は法政大学大学院人間社会研究倫理委員会の承認を受けて実施している。事前に4ヶ所の高齢者施設の施設関係者や入居・通所高齢者へ調査の目的や内容を伝え、訪問時に「調査協力同意書」ならびに口頭で目的や内容を伝え了解を得て実施した。また、調査結果の公表に関しても、施設名が特定されないようにすること、文化的社会的背景に十分配慮することを条件に許可を得た。さらには、写真の掲載についても個人及び施設責任者より承諾を得た。

4. ネパールの高齢者施設におけるダーンの実態とその特質

（1）ダーンとは

ダーンとは、サンスクリット語のdānであり、ヒンズー教や仏教においては共通して「世俗的な報酬への期待をせずに無私に与えること」という贈与の考え方である。ネパールでは、仏教徒だけでなくヒンズー教徒にも馴染みの言葉であり、実践となっている⁴。ダーンは追善供養等の時に近隣にふるまわれるが、ネパールでの高齢者施設では、近隣住民や来訪者による寄附や布施の行為をダー

³ 4ヶ所の高齢者施設については2008年3月より調査協力をいただいている（中村律子 2011）。

⁴ ネパールでは、ダーンとともに使用される用語に、ドネーションがある。ダーンには信仰に基づく宗教的な行為が前提にあるが、ドネーションは、個々の人に寄附するのではなく、施設や団体、事業などへの共同的なものに対する寄附をいうとの説明もある（Bデイケアセンター責任者）。また、ネパール語では、チャング、サハヨグなども使用されていた。

ンと呼んでいる。なお、スリランカではダーナ (dana)、日本では檀那 (布施)⁵と漢訳されている。

(2) ダーンの目的と内容

高齢者施設におけるダーンは、自分の両親や義理の両親、兄弟や子どもがなくなった追善供養、母の日、父の日、誕生日、お食い初め、ネパール祝祭 (ダサインなど) の記念やお祝いなどとして行われている。今回調査対象となった高齢者施設では、ほぼ毎日のようにダーンが行われているとのことである。もっとも典型的なダーンは、高齢者施設を利用する高齢者全員の朝食 (あるいは昼食) の料理と給仕という食事のダーン (bhojan dān : ボジャンダーン) 提供であるが、金銭、米、豆、果物、飲物、菓子、衣類、電気機器類、寝具、生花など多様である⁶。なお、食事のダーンの形式⁷をみると、一つは、高齢者全員の朝食1食分を金銭でダーンし、食事は施設の職員が作るという方法。もう一つは、ダーンするひとが入居している高齢者と一緒に食事をつくるという方法。そして、自宅で作った調理済みの食事をダーンする方法である。本調査対象のネパールの高齢者施設では高齢者全員の朝食1食分を金銭でダーンすることが中心である。施設関係者からの話では、以前は、調理済みの食事のダーンもあったが、衛生上の問題で取り止めになった場合や、調理場の制約で調理が出来ないなどの理由を述べていた。しかし、4ヶ所の高齢者施設での聞き取りのため、今後詳細な調査が必要である。

写真1は、N老人ホームで、女性の日に、支援者団体が、お米、豆、飲み物、お菓子をダーンしているものである。これらは、施設の倉庫に保管されて、食事や間食に利用されている。

ダーンする人は、家族 (親族)、高齢者施設の近隣の人、宗教家、民間団体、慈善家などである。

⁵ 国史大辞典によると、檀那 (だんな) とは、「梵語のdānaで本来は布施の意であるが、江戸時代には檀越 dānapatiと同義語として寺の施主 (せしゅ) や檀家の呼称とした。中世には寺を経済的に保護する者を外護 (げご) 者と呼んでいたが、江戸時代には檀那 (檀家) と呼んだ。檀那には、将軍や大名・豪商などのように一人で一カ寺ぐるみ支える形式と、数多くの民衆で一つの寺を支える形式があるが、後者が一般的である」とされる。また、日本語大辞典でも同様の説明がなされている。

なお、「檀那なる言葉は仏蘭西語のドンネ並に英語のドネーションと同系のもので動詞の「興へる」「授ける」の意義から出て、「寺院に寄附する」意味の名詞となった。此言語を漢譯佛典では布施と訓譯した」(上田恭輔 (大正11年)『国語中の梵語の研究』87p) とも記述されており、dān、donation、檀那との用語は興味深い。

⁶ 井戸を掘る、台所のガス、竈を作る、水タンクの設置、建物設備などの増築、改修、修繕、ベッドや椅子、机などの購入の場合は、ネパールの銀行、NPO団体、海外在住の事業家、海外援助による支援が多い。Bデイケアセンターでは井戸は日本の援助団体による。

⁷ スリランカの慈善型老人ホームのダーナ研究 (中村紗英 2011) では、ダーナには「調理持ち込み式」と「費用支払い式」があることを明らかにしている。「調理持ち込み式」とは、寄附者が食事のメニュー構想、調理、仏陀供養、配膳までおこなうことである。「費用支払い式」は食事にかかった費用を支払い、食材の構想、調理、配膳はホームスタッフがを行い、寄附者は仏陀供養、功德回向の儀礼までは施設に留まる。入居高齢者は寄附者とともに手分けして食事をとり分け仏像に供えることも行っていることを明らかにしている。



写真1 女性の日に支援団体からのダーン

（３）ダーン（食事のダーン＝ボジャンダーン）について

先述したように、典型的なダーンは、高齢者施設の高齢者全員の食事のダーン、特に朝食のダーンが中心である。ネパール社会では、一日の始まりに神（仏）に食事を供えその神（仏）からの授かり物として食事をいただくため朝食が重要なものとなっているためである。高齢者施設で食事をダーンする人は、一日に一人と決まっており、事前に予約した日にダーンするために高齢者施設を訪問する。では、N老人ホームでのダーンからその実態をみよう。

N老人ホームでは、その日のダーンについて、誰が何の目的でどのような食事をダーンして下さるのかといった内容が食堂の掲示版⁸に掲示される（写真2）。そのダーンの様子は写真3を参照していただきたい。

ネパールでの朝食は午前10時からとなっている。ダーンする女性は、ダーンを予約した日の午前9時50分頃にN老人ホームの事務所を訪れ、食事の費用（高齢者全員（40人）の朝食1食分＝4,500ルピー）⁹をダーンし、食堂へ移動していた。そのころ高齢者は各自の食器を持参し各々食堂へ集まっていた。食堂では、職員によって調理された食事（ご飯、野菜のカレー、漬物、豆のスー

⁸ 掲示版の上段には、次のように書かれている。川の水より水車が動きます。ダーンする習慣により幸せが訪れます。Sewa（世話）はダルマ（法あるいは義務）です。高齢者を支援することは自分のためでもあります。なぜなら明日我々も高齢者になります。人生は自分のためだけではなく、他人の世話のためでもあるので、我々がこの世に生きています。

⁹ N老人ホームでは、野菜のカレーなどがシンプル料理で4,500ルピー、野菜のカレーが三種類になると特別料理として5,000ルピー。肉のカレーになると1,000ルピーが加算される。1ルピーは2014年8月時点で約0.9円である。

プ、ヨーグルト、ミルク) が用意されており、ダーンする女性は職員とともに食堂に集まった高齢者一人ひとりの食器に食事を配りながら、高齢者の体調への気配りの言葉をかけていた。高齢者のなかにはお代わりをする者やお礼にお経を読誦する者もいた。女性は、高齢者の食事が終わるまで施設にとどまり、高齢者は食事が終われば、三々五々居室に戻っていく。高齢者は食堂を出るときに、ダーンする女性に対して感謝の言葉と女性とその家族の幸福と健康への祈りを捧げていた。11時頃には全員の高齢者は居室に戻り、事務所のスタッフと女性は、カレンダーを見ながら次のダーンの予約日を調整していた。

この女性がダーンをする経緯は、義父が亡くなった儀礼後にダーンしたいと考えて近隣のN老人ホームを訪問したことが最初で、2年前からダーンを行っているとのことである。これまで年に数回、義父母の命日の儀礼後のダーンをしているとのことである。今回は亡実父の46日目の儀礼を終えてのダーンで、次回は実母の命日として来年の4月の予約をしたとのことである。

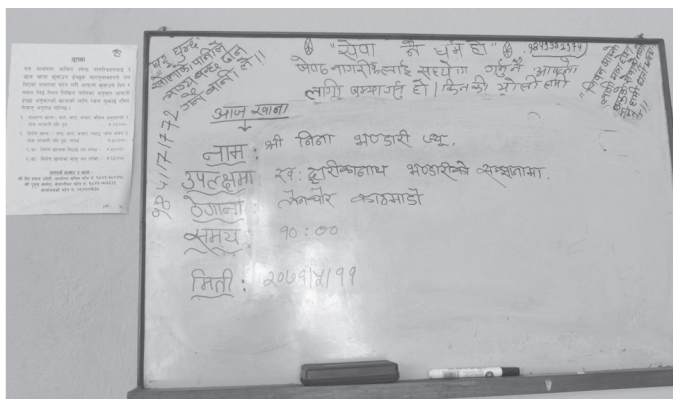


写真2 N老人ホームにおけるダーンの掲示



写真3 N老人ホームの高齢者へダーンする女性

また、Bデイケアセンターでは、12時頃からデイケアが開始されるので、午後2時頃からおやつまたは昼食がダーンされている。わたしたちが訪問した日は、ある国の外交官よりダーンが行われるとのことで、12時からのダーンの予定であった。午前中から村の調理人によって調理が行われ、やぎ肉のカレー、野菜カレー、豆のスープ、ヨーグルト、果物が用意されていた。ただ、残念ながら仕事により外交官自身によるダーンは行われず、ホールに集まった高齢者たちは、不在の外交官ならびにその家族、その国の国民に対しての感謝、幸福を願い食事前に30分ほど仏教読誦を行い、午後1時ごろからBデイケアセンターの責任者の妻たちによって配膳された食事をいただいていた。

この外交官によるダーンは、今年から行われるようになり当日が5回目とのことであった。外交官からのダーンが行われた経緯は、Bデイケアセンターに場所を貸している寺院の僧侶と外交官との繋がりの中かで始まったとのことである。これまでの4回のダーンは、以下のように行われていた。外交官は12時前にデイケアセンターに到着し、12時から始まる寺院の僧侶による仏陀供養のため1階の仏間へ移動し、高齢者と共に祈りを捧げる。その後、僧侶と外交官は僧侶の部屋で食事を済ませた後、外交官は僧侶の通訳によりデイケアセンターの高齢者一人ひとりに言葉をかけながら配膳し、時間がある時は高齢者が食事を終えるまでその場にとどまり、高齢者による食後の仏陀への祈り、外交官への食後の感謝の祈りがおこなわれる。その祈りの時間が終わってから外交官は仕事に戻るとのことであった。

P老人ホームでは、食事のダーンは不定期に行われており、またその形式も多様である。食堂や屋外で食事のダーンがおこなわれる場合は、ダーンする人が入居者の食事が終了するまで老人ホームにとどまり高齢者と談話したり、高齢者によるお礼のお経の読誦もある。P老人ホームの入居者は230人であり、寝たきりや障がいを持つ高齢者も多く入居しており、食堂や屋外で食事が出来ない場合は、居室にてダーンする場合もあるとのことだ。さらには、食事に必要な食費のみを支払って行く場合も多いとのことである。

S有料老人ホームでは、入居料の1万ルピー、毎月12,000ルピーの利用料を払い入居することが自他共に認識されているため、ダーンはそれほど盛んではないとのことであった。特に食事のダーンは多くなく、果物、茶菓などのダーンはあるが、入居者にとっては、その果物、茶菓はダーンされたものとの意識はなく「自分の入居料」によるものとの認識を持っているのが大半ではないかとの回答があった。

（４）経済基盤を支えるダーン

食事ならびに金銭、米、豆、果物、飲物、菓子、衣類などのダーンは、高齢者施設の運営財源の7、8割を占めるほどに、財政基盤を支えている実態が明らかになった。特にその傾向はN老人ホー

ムの収支報告書から一目瞭然である（表1、表2）。2013年度の収入は約510万ルピーであり、その内、政府からは20万ルピー、カトマンズ市を所轄する郡開発協会から約48万ルピーの補助金があるが、この施設の母体であるNGO団体の会員（421人）の会費、入居者からの入居金（貧困な場合は無料）、入居者の家族（親族）、高齢者施設の近隣の人、宗教家、民間団体、慈善家個人などの支援が約7割であることが明らかである。また、収入には、N老人ホームを設立したときの預貯金を定期預金化しその利子も収入に含まれていることを考えると、政府・自治体などの補助金は1割に満たない。

支出をみると、給料（医師、看護師、ケアワーカーの総数9名）に約94万ルピーが支払われ、それ以外の運営費の内訳の上位4項目をみると、食事が最も多く、その財源は支援者たちのダーンによっていることが明らかになっている。

表1 N老人ホームの収支報告書（2013年度）

収入		支出	
費目	金額（ルピー）	費目	金額（ルピー）
政府	200,000	スタッフ給料	93,7730
郡開発委員会	476,565	運営費	2,886,353.43
警察署からの支援	86,458	食堂建設費	1,240,150.58
NGO（衣料費）	15,000	繰越金	65,522
NGO（生活費）	10,000		
銀行より支援	83,2727.87		
支援者、個人の寄附	3,509,005.14		
合計	5,129,756.01	合計	5,129,756.01

表2 N老人ホームの支出の内の運営費（上位4項目）

費目	金額（ルピー）
食料	869,848
高齢者の薬、治療代	326,302
メンテナンス	159,954
ガス代	112,500

また、Bデイケアセンターの収支報告書をみると（表3）、2012年度の収入は約120万ルピーとなっている。その内、郡所轄の開発協会により建て増し建設に14.6万ルピーの補助があるが、個

人のダーン及びデイケアセンターの預貯金によるところが多くを占めていることがわかる。なお、Bデイケアセンターには有給職員はいないため給与の支出はない。

表3 Bデイケアセンターの会計報告（2012年度）

収入		支出	
費目	金額（ルピー）	費目	金額（ルピー）
定期貯金口座	650,000	利用者への間食などの茶菓代	50,311
普通貯金口座より定期貯金口座へ振替	150,000	他の年間費用及び、3回目の総会費	33,939
普通貯金口座口座利子	79,572.88	普通貯金口座（銀行）	79,572.88
会員費、ドネーションボックス及び、他の支援金	84,250	定期貯金口座（銀行）	800,000
建て増しのためR.S氏より寄附	100,000	建て増し建設費	100,000
建て増しのため郡開発会ラリトプールより補助	146,250	建て増し建設費	146,250
合計	1,210,072.88	合計	1,210,072.88

収支報告書の閲覧は出来なかったが、P老人ホームでは政府から1,300万ルピーの補助金がありその内の400万～500万ルピーが職員（14名）の給与となっている。運営費は800万ルピー程度で食料関係、衣類、治療・薬関係ということである。P老人ホームでは、食事は朝食と夕食、間食が2回であり、この食事やおやつに関するダーンは年間25%～30%ということである。定期的なダーンというよりは、父の日、母の日、両親の追善供養などとして不定期である。メディアでのP老人ホームの紹介、海外からの個人によるダーンもあるとのことである。衣類やドライフルーツのような品物は事務室に保管され、個々の入居高齢者へ手渡される。P老人ホームは世界遺産の寺院の一角にあるため、海外・国内の観光客や礼拝者によるドネーションボックスへの寄附金（多いときは70万ルピー）も多いが、それらは4ヶ月に1度回収され政府の「高齢者福祉基金」に含まれ、その基金の利子の90%を使用できるようにはなっている。ただしその利用のためにはP老人ホームでの高齢者関係のプログラムの提案が条件であることやその額は少額とのことである。また、ある老人ホームの責任者はダーンの必要性について次のように語る。「国が運営している施設では、ダーンの必要性については、民間で運営している老人ホームよりは低いかも知れない。ダーンする人がいなくても運営は成り立っている。ただし国の予算が不足すると、職員の給料を下げることやダーン

が必要となる」「国は、食料関係でダーンが盛んであるため国の予算にも（老人ホームへの）食費関係を少なくしているのでは」。それらの語りから、ダーンはその多寡にかかわらず財政的基盤と密接に関わっていることもネパールの高齢者施設の置かれている実情でもある。

5. なぜダーンするのか－ネパール社会の高齢者施設におけるダーンの文化的社会的背景

ネパールでの高齢者施設でのダーンが盛んに実践されている文化的社会的背景はいったいどこにあるのだろうか。今回の調査では4ヶ所の高齢者施設を事例的に分析しているため、いまのところ一般化できる段階にはないが、高齢者施設責任者、ダーンする人、高齢者の語りから、ダーンの意味について、以下のように整理しておきたい。

第一に、ダーンは慈悲の心を持った無私の行いであるとともに個人と神（仏）との関係においてアナンダ（幸せ：ānanda）やプンヤ（善行によってもたらされる功德、良い報い：punya）を得るためのものである。高齢者施設にダーンする者にとっては、原則一日一人しかダーンできない高齢者施設でのダーンはその具現化したものと言える。先述したようにダーンは「世俗的な報酬への期待をせずに無私に与えること」といわれている。N老人ホームの責任者は「高齢者に何かをダーンすれば我々も嬉しく、アナンダとなる。ですから、ネパール社会では誰かに何かをダーンすればプンヤを得られ、そのためにダーンする習慣がある」「お祭りや父母の亡くなった日、スラッダ（先祖供儀：srāddha）などにダーンをする人が多い」「貧しい人や困っている人を支援することも大切なセワ（世話）である」として、高齢者施設へダーンするために訪れている人たちが多いのではと語っていた。ダーンは、ネパール社会の人びとにとっての神（仏）とともに生きる生き方のひとつともいえるのではなかろうか。

第二に、ダーンはダーンする者の一個人による完結した宗教的行為としての一方向的なものという側面だけではなく、施し、慈善、恩恵などの宗教的規範を超えた、相互に功德や幸せを祈り、それらの生成に関わる相互行為を意味していることである。Bデイケアセンターの責任者が「ダーンは、ダーンする人もされる人もプンヤがあるようにと祈っておこなうことです」「貧しい人、何も持っていない人、僧侶、聖人に対してもダーンすると言います」と語る。また、他の施設の責任者は「ネパール社会では、セワ（世話）をしたいという人が多くいて、彼／彼女たちは、信頼できる善い場所においてそれを行いたいと考え、そのような場を望んでいる。自分たちがより良く運営することによって、その多くの善意を持った人が集まり、それがさらに善となっていく」とダーンすることが功德を積む行為の場であるとの意味を語っていたことから、次のように考えることができるだろう。社会的には「憐憫の対象」とみなされている高齢者施設へのダーンということに

なるが、ダーンそのものは貴賤を問わない、聖／俗の関係を超越する実践であり、ダーンを行うことも受けることもともに見返りを期待しない贈与と認識されている。そのため、ダーンを行い／受ける高齢者施設は幸せの相互贈与の場としての意味が付与されていることである。

第三に、ダーンは高齢者と家族、コミュニティとの間の架け橋の役割を果たしており、社会的な連帯をつくりだしていくためのコミュニケーションになっているし、今後も成り立っていくだろうと考えられることである。N老人ホームでダーンしている女性は、「子どもの頃、母（専業主婦）は父から貰う生活費の一部や私たちが食べるお米の一部を取り分けてそれを月に1回寺院にダーン（mutthi dān : ムティダーン）していました。私もその母がおこなっていたことを自分も行いたいと考えていました。N老人ホームでそれができるようになりました。今日一緒にN老人ホームへ来ている息子にも見てもらい伝えたいと考えています」とダーンの世代間継承の重要性を語っていた。この女性のように、近隣に居住し高齢者施設へのダーンをとおして、高齢者と対話し、つながり、ともに開かれていくということが実践され、社会的にも世代的にも継承される文化や慣習があるといえよう。

そして、ダーンが高齢者施設の財政的基盤を支えていることも、ネパールにおける高齢者施設経営、存続にとっては重要な点である。

6. まとめ

ネパールは1990年からはじまる民主化運動を経て、2008年に王政から連邦共和国になったものの、その後も政治が混乱し国家が十分な機能を果たすことができないだけでなく、市場も十分には成長しておらず、家族・地域社会、それに民族グループ、宗教グループが強力な社会的パワーになっている。そのため、高齢者介護（および死の看取り）が国家にも市場にも包摂されることなく、家族（親族）・地域社会（宗教施設を含む）に委ねられてきた。ところが1990年からの民主化運動のプロセスで個人化がすすみ、加えて海外出稼ぎの増加などもあり、家族・親族および地域社会の紐帯の弛緩が顕著になり、家族・親族・地域社会的な介護を得ることができないばかりか、排除されるものも増加しはじめている。そこで出現し始めたのが、エスニシティ、カースト、宗教などを背景に持ちながらもそれに制約されないさまざまな種類の高齢者施設であろう。ネパール社会には儒教的というのとは異なる他者への関わり方（たとえばパロバカール、セワなど）とともにダーン（布施）による幸せの達成という観念が根強く社会にあり、それが近年あらわれはじめた民間の高齢者施設の高齢者にたいするセワ、ダーンとしてあらわれていると考えられる。

中村沙絵（2011）は、スリランカの高齢者施設におけるキリスト教的外来文化であるチャリ

ティがダーナ実践によって「土着化」したことを明らかにし、それを「チャリティの土着化」と表現したが、ネパールでのダーン実践は、当然のことながらそれとは異なった状況をしめしている。本稿の事例は、ネパール文化のなかに内面化されて息づいてきたセワやパロパカルといった他者との関わりのあり方の表出としてのダーンが、高齢者施設においても実践されていることをしめしている。つまり家族や地域社会という比較的閉じられた空間で実践されてきた土着的な贈与（慈善ではない）の観念が、高齢者施設というより開かれた社会に場を得て、より開かれた（より普遍的な）実践へと解放されつつあると言ってもいいのかもしれない。

こうした実践を通して、ダーンがあらたな社会的連帯をつくり出す機動力となって、これからネパールにおけるあらたな高齢者施設の展開をもたらすのではないかと考えられる。ただ本研究はまだ始まったばかりであり、本稿は事例の報告にとどまっている。さらなる詳細な研究調査の蓄積が本研究の今後の課題である。

<参考文献・資料>

- ・サキヤ・ラタ、藤本尚久（2004）「ネパール都市住宅街区における高齢者居住空間の実態に関する研究」『日本建築学会九州支部研究報告集(建築計画系)第43号』 pp149-152
- ・田中雅一・松田素二（2006）『ミクロ人類学-エイジェンシー/ネットワーク/身体』世界思想社
- ・常田夕美子（2011）『ポストコロニアルを生きる-現代インド女性の行為主体』世界思想社
- ・中村紗絵（2011）「現代スリランカにおける慈善型老人ホームの成立-ダーナ実践を通じたチャリティの土着化-」『アジア・アフリカ地域研究第10-2号』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 pp257-288
- ・ — （2011）「現代スリランカの慈善型老人ホームとダーナ」『南アジア研究第23号』 pp100-120
- ・中村律子（2011）「ネパールにおける「Sewaの場」と老人ホームの位置」『法政大学現代福祉研究 第11号』法政大学現代福祉学部 pp125-142
- ・ — （2013）「ネパール社会における「Sewa・コミュニティ」に関する一考察-デイケアセンターを利用する高齢者への質問紙調査から-」『法政大学現代福祉研究 第13号』法政大学現代福祉学部 pp47-63

そのほか、『日本国語大辞典』小学館、『国史大事典』吉川弘文館などの「だんな」の項を引用し、参照した。

謝辞：本調査実施にあたって、4ヶ所の高齢者施設の関係者には、会計報告書の収集・閲覧、インタビュー調査、写真撮影などにご協力いただきましたことに感謝いたします。また、インタビュー

調査の通訳では、共同研究をしているアルニ・バジュラチャルエさんにはお世話になりました。

附記：本稿は、平成26年度科学研究費補助金（課題番号：25284175、研究代表：松田素二）による研究成果の一部である。